

2017.2.4 東京ホームタウン大学 第4分科会
家族と地域で考える人生の最期の準備

家族と準備する葬儀

NPO法人

JSJC 日本シニアジョブクラブ

三鷹市民の集いの場

みだか
みんなの広場

成 清 一 夫

☆ 二十年前 ☆

1996年4月18日 福岡県自宅

私 : ちょっと、話があるんだけど。俺は遠くにいるから、親父のもしものときのことを聞いておきたいんだ。

父 :

私 : 宗派は？

葬儀場は？

親族は誰を呼ぶ？

なにか言っておきたいことは？

.....。

1999年同月同日 父死去

しまってたメモを取り出して葬儀実行。

☆ 二十年前後日談 ☆

葬儀社：宗派はどちらですか？

私：真宗。

葬儀社：東ですか、西ですか？

私：えっ！

（親戚に確認したのですが、叔父と叔母のいうことが違う、仕方がないので。）

私：東で。

葬儀社：わかりました。

（翌日）近くに東のお寺がありません。

私：じゃあ、西でいいよ。

葬儀後、再度確認したら、西が正解でした。

* 東・西：東本願寺系と西本願寺系

二十年後のいま 地域包括ケアシステム

医療	⇒	医療制度
介護	⇒	介護保険制度
成年後見	⇒	成年後見制度
葬儀	⇒	制度なし

準備期間が短い

- ・間違った常識
- ・葬儀屋による誘導
- ・考える時間もない

後悔

- ①費用
- ②葬儀のあり方

準備が必要

あなたをご存知ですか？

(仏教の場合)宗派は？

葬儀社は？

斎場は？

平均葬儀費用は？

200万円(都内・2010年日本消費者協会)

そもそも、ご本人はどのような葬儀を望んでいたのか？

「戒名」ってなに？

- ①受戒によって得た名
- ②僧が使者につける法号(広辞苑)

.....

戒名とは仏教徒になった証として授かる名前のことです。
(All About)

.....

涅槃(ねはん)に到達するを目的とした、修行を行なう為に
出家した信者に、先輩や師僧が与える名前です。
(略)

現在の葬式仏教では、死者に付けられる名前に成り果て
て、商品化されています。
(Yahoo知恵袋ベストアンサー)

戒名は必要なのか？ お坊さん便って？

棺桶のこと



エコフィン ウィルライフ株式会社

そもそも お経ってなに？



某社アンケート

葬儀サービスの取引実態に関するアンケート

- ・ 4人に1人がその葬儀業者に再度葬儀を依頼したいとは思わない
- ・ 80%が事前に葬儀社を決めていません。
- ・ 56%の方が故人が亡くなってから葬儀社を決めています。
- ・ 95%の消費者は他の葬儀社と比較していません。

最近の葬儀事情

- ①今や見積りは当たり前、見積りしない業者は論外
- ②葬儀スタイルの新しい”かたち”が見られます

市民活動としての終活(1)

1. 仏教との出会い(退職後)

- ①毎週日曜日早朝座禅会
- ②仏教書を読む・HP開設
- ③般若心経カフェ

三鷹・みんなの広場
毎月第2土曜日午後



市民活動としての終活(2)

2. セミナー開催 2016年5月7日
「市民のお葬式」Part1
宗教家と語るお葬式

- ①浄土宗信楽院副住職 内田智康さん
「仏教での死と葬儀」
- ②和泉福音教会牧師 青木 義紀さん
「キリスト教での死と葬儀」



市民活動としての終活(3)

3. 動画制作(東京ホームタウンプロジェクト)

テーマ

「市民葬の啓蒙」

動画の目的の確認

その動画の視聴後に見た人がどんなアクションを起こしてほしいのか、もしくは、するかという事を考える事で、制作する動画の目的やメッセージのヒントとなり、さらに動画自体のパフォーマンスを上げる事につながります

ターゲットは？

どのような動画を作るべきかを考える際に、まずはどんな人たちに向かって作るのか「ターゲットの把握」が大切です。見る人が「活動のテーマすら知らない人」「興味はあるが自分ごとになってない人」なのか「すでに不安・悩みに直面している人」なのかによって、作べき動画コンテンツはまるで異なるものになります。



プロジェクト参加メンバー

市民活動としての終活(4)

1. 動画による意識付け(3月完成予定)

- (1) YouTubeへのアップ
- (2) 各種セミナー等での上映
- (3) CD配布による上映依頼

2. セミナーの実施

シリーズ「市民のお葬式」Part2

3. 葬儀相談

4. 葬儀予約受託

予約金信託システム整備

* 各関係者との体制づくり



動画制作チームメンバー

本プロジェクトへの協力者の方々

中下 大樹 浄土真宗僧侶
是枝 嗣人 小金井祭典(株)
久保 晶子 行政書士久保晶子事務所

霧島 誠 わくわくサポート三鷹

松村 昭一 創志舎

東京ホームタウン大学と関係者の方々

JSJC 日本シニアジョブクラブ

みたか
みんなの広場

シリーズ「市民のお葬式」Part 1 宗教家と語るお葬式

2016年5月7日
於三鷹市民協働センター

「仏教での死と葬儀」 浄土宗信楽院副住職 内田智康さん

私は現在、信楽院の副住職として活動をさせていただいています。

最近、日本の葬儀が急激な変化を見せ始めています。直葬つまり、お亡くなりになったら、なんの儀式もせずに火葬をする、とか、一日葬とか宗教者抜きのお別れ会とかいろいろなやり方、簡略化された葬儀が増えていきます。結局、葬儀に宗教者が関わってくる、その意義がわからないし、それに手間暇をかけることはどうなのか、そういう感覚が芽生えてきたということだと思います。そして、「葬式はいらない」とか「戒名を自分で決める」という本も販売されています。

そこで、葬儀は不要、ということですが、現代の科学的、合理的な考えによれば、死んでしまえばただの物体だということですから、そこになんの儀式も要らないという考え方がでてくるのも当然のことだと思います。手間暇や費用を最小限に抑えることができるというメリットもあります。ただ、葬儀をやらないという選択をするのは、故人ではなく、送り出す側ですから、送り出す側の強い覚悟が必要になります。生命活動が終わればすべて無に帰すんだ、残ったものはただの物体なんだ、ということを感じ思えるのか、信じられるのか。死んだらおしめえよ、ということを実践することができるのか、ということですが、

そういう境地はひとつの悟りの境地ですから、それはやっぱりな死生観になります。ただ、この境地にはなかなかたどり着くようにも思いません。葬式をやらないということは、この覚悟をしっかりとやらなければいけないということだと思います。覚悟ができないまま安易にこれを選ぶと、後悔することになります。きちんとお別れをしないままでは、後々までおおきな影響を及ぼすことにもなります。

最近では、葬儀をしないままでも、四十九日を機に、もう一度しっかりと供養をしてほしいという方もいらっしゃいます。葬儀をしないとおっしゃる方は、残った方に迷惑をかけない、という気持ちからだと思いますが、ご家族の方としっかりお話し合いをしていただくことが大切だと思います。

私たちは大昔から、近い方が亡くなったときは哀悼の意を示すということを行ってきました。



人間は動物と違って、近い方が亡くなったとき、ある特殊な行為をすることによって、死者と残されたものを慰めるということを行ってきました。

宗教云々以前に、三大人生儀礼と言われる、成人式、結婚式、葬儀を行うことで、しっかりと区切りをつけて次のステップに上がることにしています、その必要性は十分納得できると思います。

問題は葬儀に宗教（仏教）が関わることは是非、になると思います。最終的には、みなさまひとりひとりが、自分の信じていることがなんであるかをしっかりと見つめていただいて、自分はこうするんだ、ということでご葬儀をお勤めいただくことがよろしいと思います。考え抜いた末にご自身で決めたことであれば、無宗教葬であってもかまわないのではないかと思います。自分とご家族が納得できるスタイルを選んでいただければと思います。

日本でもっとも選ばれる伝統的葬儀は、仏教式葬儀になります。仏教はインドが発祥ですので、根底にヒンドゥー文化があります。輪廻思想というのがありますが、仏教では六道輪廻（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天界）が説かれます。この六つの世界はどれも苦しみの世界であり、仏教の最終目的は、悟りを得て輪廻から抜け出て（解脱）、涅槃の世界へ行って、永遠の安らぎを得ることです。

そして、悟りを得るためには、出家をして修行をするということが仏教の基本です。日本では、祖霊信仰と仏教が融合して、死後は仏さまになる（死後成仏）という思想が生まれました。死ぬと仏様の国へ行ってそこで悟りを得る、ということですが、さらに、没後作僧（もつごさそう：死んで出家する）が現在の葬儀の原型ということになります。

道筋は宗派によって違いますが、最終的には悟りを得ることが目的になります。日本ではこのような葬儀を何百年も続けてきました。仏教の教えにのっとって故人を送り出して、死後を安心してお任せすることができる、これが仏教式葬儀の意義ということになります。

最近、ハケン僧侶と言われるものも出てきました。お坊さん便などですね。僧侶を紹介することはたいへん増えています。大きなお寺は別としても、ほとんどのお寺がその運営に問題を抱えているのが実情です。お寺側からすれば集客力のあるところから仕事を紹介してもらえることはありがたいと考えているところもありますし、仏教に縁の無かった方に教を説けると考える方もおられます。提携しているお寺も多いですし、需要もあるということです。

しかし、私が宗の事務所で仕事をしていたときに、「お経が短くてあっという間に終わった。」とか「お坊さんとは思えないような態度だった。」とか「お寺の名前を聞いたので、ネットで検索してもなかった、調べてもらえないか。」とかたくさん相談を受けました。派遣型のお坊さんをお願いする際には、紹介会社をしっかりと見定めていただくことが大切だと思います。

また、地元で長く続いているような葬儀社さんだと地縁もあり安心だと思います。これも生きていくうちにしっかりとアンテナを張って信頼できるところを見定めておくことが肝心だと思います。

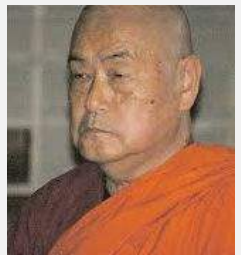
結論としては、葬儀にあたっては、どのような葬儀を行うのか、どうすれば私自身や残していく家族が納得して心やすらかに旅立つことができるのか、送り出すことができるのか、を考え、自ら選ぶことが重要だと思います。死や死後をどこに見据えるのかを考えることが大切だと思います。様々な道を示しながらも、最終的にはご自身の判断に委ねられることが仏教の最大の特徴ですから、まずは仏教を知る、ということが入口になります。

現在、日本には伝統的な仏教教団が13宗56派あると言われています。そして、それぞれが完成された教義を持っています。最終的には悟りですが、そこに至るためのルートがいっぱいあるということです。

佐々井秀嶺上人特別講演会

日本人でありながら、インドに帰化し、カースト制度に苦しむ下層の人々の支援活動に生涯を捧げ、その活動はマザー・テレサに匹敵すると言われています。（佐々井秀嶺上人の略歴は次ページ上段にあります。）

- テーマ 「インドに残るカースト制度と仏教改宗運動」
- 日時 7月2日（土） 午後2時～4時
- 場所 三鷹市民協働センター第一会議室
- 参加費 1,000円
- 連絡先・申し込み なりきよ 電話 080-1362-5359



そういうなかで、自分を振り返って、自分の置かれた縁によって、この教えを選び取ったという意識が大事なことになります。

仏教は長きにわたって伝わってくる間に、いろいろな知見や体験、経験が複雑にからみあって練りあがってきた人類の知恵の結晶みたいなものですから、どの教えが一番か、ということではなく、人によって違うということなのです。

最近では、日常から老病死、特に死というものに隔離される傾向にあります。それは、同時に私たち自身が最終的に死に至るということを実感する機会が減ってきていることでもあります。そういうなかで、今日のような機会があるということは非常に有効なことだと思います。自分の葬儀をあらためて考えるということ、それは自分の死を考えるということで、死と死後をしっかり考える機会だと思います。

今の生き方をより充実した生き方にしていくことが最終的に自分の死にあたって「ああ、いい人生だったなあ。」と納得した死となる、生きていることが死と直結しているということに気づかされるということになると思います。死を怖がらずにしっかりと向き合うことが、日々の生活をより良いものにする第一歩になると思います。

ご清聴いただきましてありがとうございました。



同日の和泉福音教会牧師 青木 義紀さんのお話「キリスト教での死と葬儀」は、来月のチラシに掲載させていただきます。

シリーズ「市民のお葬式」Part 1 宗教家と語るお葬式

2016年5月7日
於三鷹市民協働センター

「キリスト教での死と葬儀」 和泉福音教会牧師 青木 義紀さん

私はもともとキリスト教の家庭に生まれたわけではありません。母親が教会に通うようになって、その内に私も教会に行くようになって、そしてクリスチャンになりました。

1999年に牧師になりましたが、3年間働いた後、アメリカ、オランダ、ベルギーに留学する機会を得ました。2014年に復職して、三鷹の教会に派遣されました。現在は、杉並区のと泉福音教会に勤めています。

今日は、「キリスト教の死と葬儀」ということで、基本的なことをシンプルにお話しさせていただきますと思います。

キリスト教で、死とは何なのかということですが、聖書を見ますと、もともと人間は「死なない存在」として創られたと書かれています。神さまがエデンの園にいるアダムに「園のどの木からでもいいのままで食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ」と言われました。しかしアダムとエバは、これを取って食べてしまいました。その結果、人は死ぬ存在になってしまいました。人類の代表であったアダムとエバが犯した罪によって、罪が世界に入ってきました。これが、聖書の語る死の始まりです。ここから、すべての人が死ぬこととなりました。

今日の会を紹介した朝日デジタルの記事に「人は100%死ぬ」と書いてあります。私たちは、当たり前のように違和感を覚えませんが、死については慣れることがあります。死を迎える時、私たちは常に恐怖と異質性を感じます。なぜか。それは、人がもともと死なない存在で、死は本来の人間にはなかったものだからです。死は当たり前ではない。これが聖書の基本的な理解です。死は、罪の結果なのです。

ただ、イエス・キリストが十字架にかけて、すべての人の罪の身代わりとなってくださった。人類の罪を一人で背負ってくれた結果、人間の死の意味に変化が起きました。イエス・キリストの罪の解決を自分のものとした人は、死が単なる罪のさばきではなくて、「救いの完成」の入り口になるのです。信仰者にとっては、死が希望になるのです。

では、信仰者にとって死が希望であるならば、信仰を持たない人にとってはどうなるのか。



信仰を持たない人は、死の責任を自分で負わなければならないのです。では、信仰があるかないかを判断するのは誰か。それは、私たち人間ではなくて、神さまです。誰が滅びるかということは、決して人間が判断できません。これは、神さまに委ねるしかないのです。

信仰者にとって死は希望です。では、クリスチャンは死を悲しまないのか。決してそんなことはありません。クリスチャンにも、家族や身近な人を亡くした悲しみはあります。しかしそれは、絶望の悲しみではなくて、ひと時の別れの悲しみです。亡くなった方には、やがてもう一度会えるという、希望を残したひと時の別れの悲しみなのです。信仰者も葬儀で悲しみます。泣きます。落ち込みます。でもそれは、この地上ではもう会えないという悲しみであって、そこには天でもう一度会えるという希望があります。そして今度は、天で永遠にともに生き続けることになるのです。

死には、ひと時の別れの悲しみはありますけれども、それ以上に、神さまに創られた人間が、もう一度、神のもとへと帰っていくという故郷への帰還にも似た安心があります。究極的に私たちは、死を通してその安心を味わうことになるのです。そして死は、私たちの人生の完成です。人それぞれ、人生の中に目標を持っていますが、それを達成したからといって人生は終わりません。人生の究極的な目的は死であり、死の向こうに生きることです。死が最終目標ではなく、死を突き破って生きることで、最後までしぼんでいかない人生を私たちは歩むのです。

キリスト教では、亡くなられた方を「召天者」と呼びます。イエス・キリストには「昇天」という言葉を使いますが、信仰者には「召天」という字を使います。それは、神さまから天に呼ばれて、神のもとに帰るという意味です。

次に、キリスト教の葬儀の基本的な理念の話に移ります。

キリスト教の葬式には、「鎮魂」といった魂を供養する視点は一切ありません。だから、故人に語りかけたりはしません。亡くなると、人は神さまの完全な支配のもとに置かれるので、生きている側から死んだ人に何か働きかけて、その結果行き先が変わるということは一切ないのです。葬儀は、亡くなられた方の生涯や人生の足跡、あるいは故人の存在を偲ぶために行ないます。仏教の輪廻転生のような考え方は、キリスト教には一切ありません。

人生は、たった一度きりです。人は、一度生まれて、一度死ぬ。それだけです。だから、一度限りの人生に大きな価値があるのです。神さまに生を受けたかけがえのない人生です。他の人と、決して同じではない人生です。ですから、その人がどういう人生を送ったかということが、かけがえのない尊さを持つのです。キリスト教は、それを重んじます。そして、その人の尊さ、大切さを、みんなで味わうということが、葬儀の重要な中核になります。そのことを通して、故人にいのちを与えて、生涯を導いた神さまのすばらしさを、みんなで味わうのです。

以上のように、故人に大きな価値を置きますから、その方と一緒に暮らしてきた人たちは、大きな悲しみに陥ります。だから、遺族や関係者を慰めることを大切にします。

先の内田副住職のレジュメには、仏教ではしっかりとした儀式で死者を送ることが本義で、残された人の安心は副産物だとありましたが、キリスト教ではむしろ逆だと言えるかと思えます。

そして葬儀のもう一つ大事な点は、ひとりの人の葬儀を通して、自分もまた、やがては死ぬべき存在なのだという厳粛な事実を思い返して、今後、死を迎えるまでの人生を、どのように生きていくべきかを問い直すということです。

キリスト教では、死を希望という基調で見ますので、葬儀全体も希望を大事なものとして営んでいきます。聖書の中には、「悲しみに沈むことのないために」という言葉があります。死んだら終わりだという絶望感に陥るのではなくて、死を通して生きていく永遠の命があるのだということ。その希望をもって生き続ける存在だということ。それを大切にします。だから、キリスト教の葬儀には、どこか明るさがあります。悲しんでいる人はいますが、絶望はしないのです。

日本人で、はじめてキリスト教の葬儀に出るといふ方から、やってはいけないこととか口にしてはいけないことなどがありますか、という質問をしばしば受けます。

キリスト教には、死をめぐって「縁起」とか、「忌むべきもの」が基本的にありません。だから、そういうタブーに縛られるということがないのです。

では、実際にキリスト教の葬儀がどのように行なわれていくかを紹介します。まず、牧師はその人の末期段階から呼ばれます。病院や自宅に赴いて、その人の手をとって、慰めや希望を確認して祈り、死に向かう準備をします。以前にある僧侶の方と話をしていたら、「牧師さんは良いですね。僧侶がその段階で病院へ行ったら、縁起でもない」と追いつ返されます。」(笑)と仰っていました。

息を引き取ったら、まず、近親者だけで遺体を棺に移す小さな式を行ないます。それから、通夜に当たる前夜式を行ない、そして告別式となります。告別式の後は、火葬場へ行って、そこでも小さな式を行ないます。また、遺骨を墓に納める時も、墓の前で納骨式を行ないます。これは、葬儀当日の場合もありますが、数年後ということもあります。どの式も基本的な内容は、神への祈り、讃美歌、聖書の話の三つです。

「〇回忌」というものはありません。家庭によっては、記念会をして、亡くなった方を偲ぶ時を持ちます。それは、亡くなった方が消えてなくなったのではなくて、永遠に生きているということ。そして、やがて自分たちと一緒に永遠に生き続けると考えるからです。教会全体でも、春のイースター(キリストの復活祭)や、秋の召天者記念礼拝などで、亡くなられた方を偲ぶ特別な時を持ちます。

キリスト教では、葬儀は亡くなられた本人というよりも、むしろこの地上に残された方々のために行なうところがあります。亡くなられた本人はもうすでに神さまの完全な守りの中に置かれているからです。

ヨハネの黙示録には、こういう言葉があります。

「神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

天国には、苦しみとか、泣き叫びとか、そのほか私たちにとって苦痛となるものは一切ありません。だから、亡くなった人のために私たちが心配したり、悩んだり、落ち込む必要は一切ないと、聖書は語っているのです。

ありがとうございました。